

館長室へようこそ⑧

新しい手帳

図書館長 古川 聡

四月を迎えるにあたり新しい手帳を購入した。私が使っているのは四月始まりの手帳である。新しい手帳を持つと気分が高まる。まだ年度が始まったばかりなので、さすがに書き込む予定も少ない。時間にゆとりがあり、今年はいろいろなことができるはずだという淡い期待に胸が膨らむところ。ところが時間経過とともに所々に用事が書き込まれ、中には来年の三月の予定なども入ってしまうと気分は下降気味。そこで、誰かに決められた課題を黙々とこなしていく毎日にならないように、敢えて友人と会う機会を作って手帳に書き、しかもわざわざそれを赤い四角で囲ったりする。手帳に書き込まれるのは、これからの予定、やらなければならぬ課題や作業であろう。もちろん日記のような使い方をして、日々の出来事もメモされる。過去のできごとなどの記憶は回想的記憶というのに対して、今後の予定やプランは展望的記憶と呼ばれる。試験で問われるのは回想的記憶であり、待ち合わせの日時に遅れずに出向くのは展望的記憶の一例といえる。二つの記憶はただ区別が異なるだけではなく、適切に処理できなかった時に周囲の対応が違ってくる。試験ができないと、「何を勉強していたのか」と叱られて能力の有無を問われる。しかし待ち合わせに遅刻すると、「信頼できない人だ」と人間性の面に疑問符がつけられてしまう。そうならないためにも手帳は重要だ。

手帳を初めて買ったのはいつだったか。高校生の頃にそれこそ手に入るほどの小さな手帳を買ったが、部活の予定や試験の日程くらいしか書くことがなかった。それが大学生になつてからは、アルバイト先の面接や旅行の日程などが書き込まれ、手帳なしでは生活がままならなくなつた。手帳は私たちが生きてきた証を示すもの。新入生のみならず、みんなの手帳にたくさんの方が書き込まれていくことを願う。

新入生の皆さんへ～

内田千陽（演奏学科声楽専修3年）

春、期待に胸をときめかせ、新たな環境や出会いにちょっぴり不安を感じたりする、そんな季節ですね。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。私は昨年、今年と続けて基礎ゼミで図書館案内をしました。利用する側から案内する側になったものの、自分にとってたくさん発見がありました。

参考図書室には音大であるにもかかわらず時代ごとの美術図版や地図、熱帯魚図鑑や菌類図鑑などもあり、資料の豊富さに驚きました。眺めているだけで別世界に迷い込んだような気分になります。書庫の中には、オペラのレーザーディスク、DVDやCD、いろいろな出版社の楽譜や音楽関連の図書、その他にも様々なジャンルの資料（例えばディズニーやジブリのアニメーションやミュージカルなど）も揃っています。

1年生の時には、書庫の中にこれほど多くの資料があることを知らなかったの、なぜもっと頻繁に利用しなかったのだろうと、歯がゆい気持ちになっています。当時私は「図書館＝勉強するところ」というイメージがあり、何となく近寄りがたく感じていたのです。皆さんの中にもそういうイメージを抱いている人がいるかもしれません。もちろん勉強するところでもあります。それ以外にもDVDを見たりCDを聴いたりしてモチベーションを上げたり、資料を通して探究する楽しさを感じさせてくれるところで、私の大学生活にはかせない場所になりました。

いつも資料を届けてくださるパートの方達や、困った時に助けて下さる館員の方々に感謝しています。

皆さんもめいっぱい利用してくださいね。そしてまた図書館でお会いしましょう！